

二〇一七年度

聖園女学院中学校 入学試験問題

国語

(時間 五十分)

〔注意事項〕

- 一、試験開始の合図があるまで中を開いてはいけません。
- 二、受験番号・氏名を解答用紙の定められた欄にかならず記入しなさい。
- 三、試験問題の印刷がはつきりしない場合には手をあげなさい。
- 四、解答は解答用紙に記入し解答用紙のみ提出しなさい。

一
次

一、次の——線部をひらがなに直しなさい。

- (1) ポンプで水を吸引する。 (2) 食事の作法を身につける。 (3) 弟の寝言が聞こえる。
(4) 親類へ手土産を持っていく。 (5) 同じクラブに誘う。

二、次の——線部を漢字に直しなさい。

- (1) 鉄道のもけい。 (2) 急いでいえじにつく。 (3) 仕事のいらいを受ける。
(4) はがきをゆうびんきよくへ買いに行く。 (5) ずずしい風がふく。

三、次の文章を読み、後の各問に答えなさい。

「自然保護」という言葉をよく聞きますが、なぜ人間にとって、自然が大事なのでしょう。温暖化現象を防ぐため、生物多様性を保って自然界のバランスを崩さないためなど、理由はいくつも挙げられるでしょう。

ぼくはこう考えています。人間にとって自然が必要な理由は、人間には自然からしか学べないことがたくさんあるからだ、と。

たとえば、都会のビルの谷間を歩いているときに、突然ゾウが走ってきたり、ワシやタカが舞い降りてきたりすることはありません。頭上から熟れた果実がぼたぼた落ちてくることもないでしょう。もしこんなことが街中で起これば、それは大アクシデントです。

でも、自然の中では、向こうから何がやってくるか、空から何が落ちてくるか、はたまた地面に何があるかもわかりません。予想できないことだらけです。

だから、自然の中に身を置くのと、街の中に身を置くのでは、人間の「構え」がおのずと変わってくるはずなのです。

次々と起こる予想もしないことにひとつひとつ対処をしながら生きていく、という構えを持つのか。それとも、想定内のところで安全かつ自分の思いどおりに生きていく、という構えなのか……。

今は、自分が思ったとおりにできないことがあると、すぐにイライラしたり、「失敗した」と思って、ひとつの出来事をととても重くとらえてしまったりする人が多いように見えます。

人に対しても同じです。相手と話がうまくかみあわなかったり、自分の意見に賛同してくれなかったり、自分の期待どおりに動いてくれなかったりするときに、「嫌われてるんじゃないか」とか、「裏切られた」とか、果ては「相手がおかしいんじゃないか」とまで思って傷ついてしまうことはありませんか。

でも、本当はそうではないはず。相手と自分とはちがうのですから、思っていることもちがって当然です。また、相手の反応も数あるうちのひとつであって、絶対的なものではありません。相手と自分との間にある種の「遊び」や「間」があって、さらに少し「ズレ」があると気づくことが大事なのです。そして「ズレ」を認められれば、ちがう考えを持った相手とも、いっしょに歩いていけるはず。ようは、「構え」しだいということ。そう。

そういうふうに見ていかないと、今生きている世界が、ガチガチに固められた、きゅうくつで息苦しいものになってしまうような気がしませんか。

自然の中に身を置いていると、そのことが体でわかります。たぶん、ジャングルの中に放りこまれたら、^⑤すくに実感しますよ。思いどおりにいくことのほうがよほど少ない、と。

でも、「思いどおりにいかない＝失敗」ではなくて、どうしたらいいかを考えるチャンスと考えればいいのです。思いどおりにならないことに出会った瞬間が、じつは、ものごとはじまりであって、前に進むための扉を開けるきっかけなのです。

人間にとって自然が必要なのは、こんなふうには、しなやかな構えを肌で感じ、生きる知恵として自分のものにしていくためなのではないでしょうか。

みなさんは、親があれこれ口を出してくるのを、うっとうしく感じたことはありませんか？ あるいは、^⑥耳の痛いことをいつてくる友だちに「放っておいてよ」と思うことがあるかもしれません。

なぜこんな「おせっかい」をやくのかというと、人間は信頼に固執^{こしつ}するからです。信頼しているからこそ、相手の考えていることや感じていることに共感したいのです。信頼していない相手と共感したいとは思わないですよね？ それは、人間が信頼できる関係が築ける大きさの集団を作り、その中で共感を育てていったことを見ても、はつきりしています。

ところが、最近は少し事情が変わってきました。大家族のしがらみや、共同体の人間がおせっかいを嫌って、自由を追求した結果、信頼も共感も薄まった社会、おたがいに頼りあうのが難しい、孤独な集団を作ってしまったいました。

では、信頼や共感を土台にした、おせっかいを焼きあう社会に戻ったほうがいいのかというと、^⑦これもまた度が過ぎると、やっかいなことになる可能性があります。

たとえば、だれかと「おいしいね」といいあいながら食事をする、幸せな気分になります。一見共感しあっているように見えますが、味覚は共有できませんから、相手も自分と同じようにおいしいと思っっているかどうかは、本当はわかりません。さらにいうと、だれかと何かを共感できる能力に自己満足している面も、少なからずあるのではないのでしょうか。

ですから、共感が過剰^{かじょう}になると、暴力につながることもあるのです。「なんでわかってくれない？」と、共感を強要していることに気づかないまま、愛が憎しみに変わってしまうように。共感^⑧は「諸刃^{しよへ}の剣」でもあるのです。

どうやら共感や信頼が薄まった孤独な社会も、共感や信頼が濃^こすぎる社会も、どちらも生きづらそうです。いったい、どうすればいいのでしょうか。

ぼくは、「自然」本来のつきあい方にヒントがある、と考えています。

たとえば、ゴリラのフィールド^{※2}・ワークをしていて、ぼくがピンチにおちいても、ゴリラはぼくを助けてはくれません。そういう意味ではゴリラは冷たいといえるでしょう。

でも、つきあっていけばいくほど、そばにすることを許してくれたり、いっしょに遊んでくれたりすることもあります。そういう意味では、^⑨とても懐^{なつか}が深いのです。

こういう、冷たくて懐が深い、しなやかなつきあい方を出発点に定めて、人間の社会をどう作っていけばいいか、考えてみたらどうでしょうか。人間は、ある意味ではもつと冷たくてもいいけれど、同時に、他者をもつと受け入れる懐の深さがあってもいい。

「受け入れる」ということを、頭で考えると難しいかもしれませんが、ぼくたちのいちばん身近にある自然^{||}自分の体に聞いてみると、わかりやすいかもしれません。

人間の体には、もともとさまざまな能力が備わっています。自然の中で暮らすことをやめてしまった今、使われていない能力もたくさんありますが、完全に失ってしまったわけではありません。まずは、どんなものなら受け入れられるのか、自分の体に聞いてみる。そこからはじめればいいのです。

たとえば、ぼくらは、ケンカの罵声^{ばせい}や、工事現場で機械がガチャガチャいう音はうるさいと感じますが、鳥のさえずりや秋の夜長の虫の鳴き声、子どもたちが遊ぶ元気な声をうるさいとは感じません。そういうことは、頭で考える前に、自分の体を感じることで。

自分の体に聞いてみることを意識しだすと、今の社会が、人間が本来豊かだと感じる社会からずいぶん遠くはなれてしまっているということも、これからどんな社会を作っていきたいのかというヒントも、見つかるかもしれません。

それには、どうしても人間以外の動物がいないとダメなのです。やっぱり人間を映し出す「鏡」が必要だというわけです。

ゴリラたちは、そのよき鏡になってくれると、ぼくは信じています。

（山極寿一『15歳の寺小屋 ゴリラは語る』より。一部改変）

*

- (語注) ※1 アクシデント……思いがけない不幸な出来事。事故。
※2 フィールド・ワーク……研究室の外に出ている調査や研究。

字数制限のあるときには、句読点や記号は一字と数えなさい。

- (問一)——線①「考」の部首名をひらがなで答えなさい。
(問二)——線②「しか」を用いて、主語・述語のとのった短文を作りなさい。
(問三)——線③「人間の『構え』」とありますが、自然の中に身を置くときはどのような構えになりますか。文中から四十文字以内で探し、始めと終わりの五字を書き抜きなさい。
(問四)——線④「遊び」の意味として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
(ア) 会話 (イ) ゲーム (ウ) ゆとり (エ) ルール
(問五)——線⑤「すぐに……よっぽど少ない、と」とありますが、この実感から何がわかるかと筆者は考えていますか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
(ア) ジャングルの中に放りこまれると、最初は思いどおりにいかなかったこともできるようになること。
(イ) 自分と相手の間にある「ズレ」を認めると、ちがう考えを持った相手とも行動することができること。
(ウ) 今わたしたちが生きている世界は、ガチガチに固められた、きゅうくつで息苦しいものだということ。
(エ) 生きる知恵を自分のものにするために、人間は自然の中で暮らさなければならぬということ。
(問六)——線⑥「耳の痛いことをいつてくる友だち」とはどのような友だちですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
(ア) 自分のいたらないところを注意してくれる友だち。
(イ) 自分の悪いところを受け入れてくれる友だち。
(ウ) 自分の良いところをいつもほめてくれる友だち。
(エ) 自分のすぐれたところを否定してくる友だち。
(問七)——線⑦「これもまた……可能性があります」とありますが、どのような可能性があるのですか。「可能性がある。」に続くように文中から七字で探し、書き抜きなさい。
(問八)——線⑧「諸刃の剣」とは「一方には利点もあるが、また一方には危険をとまなうたとえ」のことです。共感の利点を説明しなさい。
(問九)——線⑨「懐が深い」の意味として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
(ア) 成長している (イ) 理解を超えている
(ウ) 包容力がある (エ) 度胸がある
(問十) よりよい人間関係や社会を作るために、何をするかを筆者は提案していますか。*「」の中から十二字で探し、書き抜きなさい。

四、次の文章を読み、後の各問に答えなさい。

冷たい風とかけっこして、窓の下まで来ると、ギターナが歌っていた。

「へっ、またやっている。」

アキコは、にやにやする。借りてきたまん画、^①おおっぴらに読めるというものだ。

——このごろの母さん、しようがないんだ。母さん業サボって、ギターに夢中——。

本気でそう思ったわけではない。学校から帰ればテストだ宿題だとうるさい母さんより、ずっといいと思う。アキコはあまのじゃくだから、母さんに言われなときは、勉強だってちゃんとするんだ。もうすぐ六年生だもの。自主性を認めてもらいたい。それに、ギターに打ちこんでいる母さんの情熱のようなものが、アキコを、なまけていられない気分にしてしまうのだ。

母さんは、いつものとおり夢中だった。アキコが帰ったのにも気づかないで、『マクラの舞曲』^②とかを、ムードたっぷりひいている。

「あら、アキちゃんとはつゆ知らず、失礼をば……。」

やっとふり向いた母さんの目は、ぬれたように光っていた。

——母さんの目、きれいだったんだな——。

と、アキコは思った。

^②母さんは、変わった。

今までのような、きつちりやさんではなくなったのだ。だらしないくらいだ。「いけませんね」と、アキコが、お説教したくなる。

そうじの途中で一曲ひいたりするの、許せる態度だろうか。わすれ物やになったのも、ギターのことばかり考えているせいだ。粉だらけになってドーナツを作り、あげようとしたら油が空っぽだったり、コーヒーを入れたら砂糖が切れていたりなんて、今までの母さんには、まずなかったことだ。

「ギターナのせいは、父さんのせい。」

母さんは、けろりとした顔で、「アキちゃん、お願い。」^③を連発。そのたびにアキコは、自転車でとび出す。

「三十分だけね。」

おやつを食べたあと、母さんは、ギターナを取り上げた。

「リサイタル、もう一か月しかないんだから。」

「リサイタル！ だれの？ 母さん、するの。」

「そう、花田ハルコのギターリサイタル。」

「花田ハルコだつて？ ふふふふ。」

アキコは、思わず笑いだした。

確かに母さんは、花田ハルコという名前だ。でも、花田ハルコなんて言うのと、母さんではないようだ。だれかほかの女の人のような感じがする。

茶の間のとういすでギターをひいている母さんの花田ハルコさんを、アキコは、改めて見直した。

くり色がかったかみの毛が、かたの上でゆるくカールしている。うすもも色の丸いほお。鼻の横にあずきぐらいのほくろが一つ、ぷちんと張りきっていて、ついさわってみたくなる。左が^{ひとえ}一重まぶたで右が^{ふたえ}二重の目は、大きさが少しちがって見える。ぶどう色のセーターを着て、グレーのハイソックスの足を組んだ上に、ギターナが収まっている。

ギターに夢中になっている母さんには、^④「母さん」という一言に、入りきらないところがあるようだ。それが、

「花田ハルコさん」なのだろうか。

晩ご飯のしたくもすみ、父さんの帰りを待っているときだった。

「おじいちゃん、いいバンドがありますけど、買いませんか。クリスマスの忘年会じゃ、音楽がいるでしょ。」

「……。」

「そうね、そんなに高くないでしょう。初めてだから、勉強させます。」

「……。」

「えっ、名前？ ええと、あのね、花田ハルコとギターナ・ロマンティカ。」

電話を切ると母さんは、声はずませた。

「ステージとれた。さて猛練習。なにしろ、花田ハルコとギターナ・ロマンティカ、なんですからね。」

名前のおり、母さんがバンドマスターだ。アキコは、タンバリンでリズムをとるように命じられた。

「なかなかいいわね。『ギターとタンバリンのための協奏曲』ってないかしら。」

と、母さんが言った。

「『ギターとタンバリンのための狂騒曲』なら、おれが、作曲してやろうか。」

いつのまにか、父さんが帰っていた。

母さんは、父さんの音楽的才能に、うたがいの目を向ける。

⑥「いや、作曲は、まだ未知数ですぞ。」

父さんは、オーバーを着たままで、新聞を丸めたタクトをふり回した。おでこでえくぼなんかできる父さんの顔は、作曲の才能がかくされているようには見えない。アキコと母さんは、顔を見合わせると、ふきだした。

⑦「あつ、父さんは、ウクレレお願い。もちろん、リズムだけでけっこうよ。」

ハルコバンドマスターは、命令する。

ギターナ・ロマンティカの、練習が始まる。

——母さんは、花田ハルコ——。

母さんは、母さんだけでなく、花田ハルコという一人の女の人の人なのだ。

あたりまえのことなのに、アキコは、初めて気がついて、とまどっていた。

⑧今まで、母さんに、感じたことのない気持ちだ。新しい友達を見つけたように、楽しい気持ちがあふく。

それなのに、そんな心の裏側は、なぜかしら、さびしいのだ。

⑨——母さんは、花田ハルコ——。

「ハルコさん。」

と、呼んだら、母さんがふり向いた。小首をかしげた笑い顔は、いつもの母さんだった。

「母さん、すき。ハルコさんも、すき。」

アキコは、自分に言い聞かせるように、つぶやいた。

(武川みづえ『ギターナ・ロマンティカ』より。一部改変)

字数制限のあるときには、句読点や記号は一字と数えなさい。

- (問一) — 線①「おおっぴらに」の意味として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
(ア) 楽しく (イ) 遠慮えんりょしないで (ウ) じつくり (エ) 飽あきるほど
- (問二) — 線②「母さんは、変わった」とありますが、何が母さんを変えたのですか。「に対する」を用いて十字以内で答えなさい。
- (問三) — 線③「そのたびにアキコは、自転車でとび出す」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
(ア) わすれ物やになった母さんのかわりに品物を買に行くから。
(イ) わすれ物やになった母さんに嫌気がさして気分転換をしたいから。
(ウ) わすれ物やになったことを父さんのせいにする母さんにあきれたから。
(エ) わすれ物やになったことを母さんに反省してもらいたいから。
- (問四) — 線④「『母さん』という……」ところがあるようだ」を、わかりやすく言い換えた次の文の二つの空欄に当てはまる同じ言葉を漢字一字で答えなさい。
母さんはアキコが見ている「母さん」という□□だけではなく、いろいろな□□があるようだ。
- (問五) — 線⑤「られ」と意味・用法が同じものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
(ア) あなたの一言に助けられた。 (イ) 時間内にすべて答えられた。
(ウ) 東京からお客様が来られた。 (エ) この一年は短く感じられた。
- (問六) — 線⑥「いや、作曲は、まだ未知数ですぞ」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
(ア) はじめて作曲をするので、大した曲にはならないだろうということ。
(イ) 作曲はやってみたことがないけれど、曲の作り方は知っているということ。
(ウ) ギターはうまくひけないけれど、曲を作るのは意外と上手だということ。
(エ) もしかしたら、素晴らしい曲を作ることができるかもしれないということ。
- (問七) — 線⑦「もちろん、リズムだけじゃなく」には母さんのどのような気持ちがこめられていますか。次の空欄に当てはまる言葉を文中から探し、□□は五字で、□□□□は四字で書き抜きなさい。
父さんの□□□□に□□□□を持つ気持ち。
- (問八) — 線⑧「とまどっていた」とありますが、どのようなことにとまどっていたのですか。その内容が最もよくわかる一文を文中から探し、始めと終わりの五字を書き抜きなさい。
- (問九) — 線⑨「母さんは、花田ハルコ——」とありますが、この時アキコはどのような気持ちになっていたのですか。説明しなさい。

問題は、ここで終わりです。